

3. 10 京都府の活動報告

健全ネットワーク京都

1. 事業概要

(1) 事業の目的

京都府内に避難されている約 450 世帯の家族が、今抱えておられる悩み、諸問題の相談解決に向けての対応を行い生活の安定を提供する事業である。

避難生活も 2 年近く経験されて、新たな問題、特にご高齢の方たちへの生活の安定を図り、居場所づくり、仲間づくりの活動として、地域住民と避難者の方たちが触れあえるイベントを開催する。

その中で被災者同士、また地域住民ともお互いに親しくなり、本事業の目的である仲間づくりが実現し、被災者の方が慣れない土地で苦悩を内に抱えておられる日常生活を、少しでも明るいものに繋げる支援の方策を考えて行く。

(2) 実施体制、他団体との連携、他地域との連携状況

23 年度に設立された府内の避難者支援団体「プラットフォーム」の組織に加わり、月 1 回開かれる情報交換会に参加して、避難者が抱えておられる現実問題をじかに聞き取り、支援する側と支援を受ける側の情報を、京都府の協働コーディネーターが繋ぎ、支援実施に向けて、アドバイスをしてくれるシステムが定着して支援活動に繋げることが出来た。開催地域の、市町村、社会福祉協議会、府の女性団体等にも協力を呼び掛け力強い連携が得られた。また NPO 京都コミュニティー放送「京都三条ラジオカフェ」が定期的に、避難されている方達の生の声を流してくれる支援活動が事業推進の力になった。

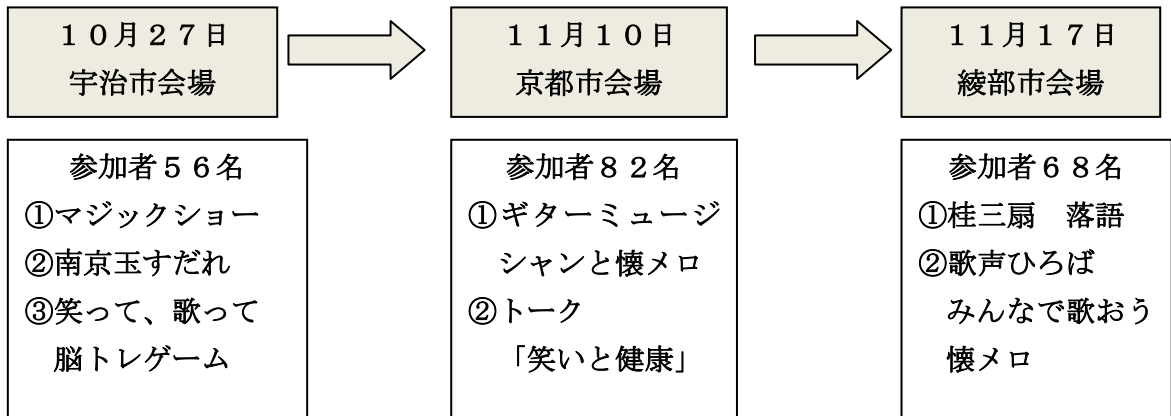
(3) 事業の実施内容

◆ステップ①

震災で被災した家族が、仕事の都合上また、子どもたちの健康問題上から夫を現地に残し母子（若年）が高齢の両親と共に京都府へ避難して来ておられる家族が多く、年老いた両親の健康問題、行き場、話し相手等の問題解決の手助け求められた。

今事業は、この様な現状に少しでも寄り添える事業として、「避難されている人たちの仲間づくり」を目的とした、「笑って、いきいき、お達者で」～みんな一緒に、輪の中で～の、テーマで事業を、京都府内三か所の圏内で、避難者の方々（特に高齢者家族）が地域住民と一つの輪の中で楽しく過ごしてもらう集いを企画した。

それぞれの地域になじみ深いゲストを招き、下記のスケジュールでイベントを開催した。



三会場合わせて200名余りの参加者に対して、仲間づくりに繋ぐ次へのステップが必要であり、もう一步あゆみ寄り意思の疎通が図れる方策として現在、行政、自治体の支援を受けながら定着しつつある既存の、高齢者の生きがい推進事業への参加を呼び掛ける事にした。

◆ステップ②

今事業を通して親しくなれた避難者家族、支援団体、行政関係者が一堂に集まり、12月1日に京都市内において、「東日本大震災これからの支援のあり方」をテーマにシンポジウムを開催した。

- 1部、震災直後の福島を記録した映画の上映会
- 2部、シンポジウム

避難者の会代表 NPO支援団体代表 事業推進団体
コーディネーター 前京都災害ボランティア支援センター長

支援に関わって来た者、これから支援活動をして行く者、活動資金の助成団体等、お互いの立場から、これから必要とされる支援のあり方に付いて、意見交換が交わされ意義深いシンポジウムになった。

◆ステップ③

既存するイベントへ避難者の参加呼びかけ活動を始め。

- 1) 京都市長寿すこやかセンターが主催する、毎月1回の「すこやか教室」(健康体操と専門医師の話)は、広報誌で呼び掛けを協力してくれた。
京都健生協議会の会員個人が主宰する教室や、イベントにもきめ細かい広報活動を繰り返して参加を呼び掛けた。
- 2) 宇治市、城陽市、圏内における地域の高齢者の居場所を目的とした「なごみ丘屋」への参加を呼びかける。

3) 綾部市、南丹市圏の「脳トレ教室」、「袖ふれあえば多笑の縁 サロンみんな
でいきいき」への参加を呼びかける。

いずれの集会にも、回を重ねるごとに高齢避難者の顔ぶれが少しずつではあ
るが増えている。

2. 事業成果

(1) 成果

今事業を受託して、事業目的が日常生活の中における「仲間づくり」が目的と言
うところから、先ず親しくなった避難者の方たちに直に会って今のような支援が
待たれているのか、率直な思いを聞き出す事から始めた高齢の方達は狭い住居の中
で、行き場も話し相手もなくうつ状態に陥る人が少なくない事を知らされる。

高齢者を元気にする、楽しいイベントの開催の要望を望んでおられる事がわかり、
地域住民とのコミュニケーションづくりを考えた、事業企画プロジェクトを立ち上
げた。

統計的に見た、比較的避難者が多い地域を選び出し、府下3圏内に絞りその地域
圏内に在住する京都健生の活動可能な会員をプロジェクトチームに加え、地域性を
重視したイベントの企画を考えた。集客活動も行政に顔のきく当地の会員に任せた。

我がチームこそ喜ばれるイベントを開催したいという思いが、各チームを掻き立
てた事も事業の成果にも繋がった。

「居場所づくり」「仲間づくり」はまだまだ途上だが、現在既存する身近な集会に
お誘いした事が、避難者の方達が一步を踏み出す機会になった事は確かであり、避
難地の京都で信頼できる顔見知りができ、安心して、ゆっくり心を開いてもらえる
支援の継続に繋がった事と確信できる。

(2) 問題点・課題

今後も継続してもう一步、歩み寄れる支援をして行きたいとの思いは大きい
が、先立つものは運営資金であり、月日が経つにつれ震災への風化が感じ取れる狭間
で、被災者の方から身を切られるような悩みを聞かされる時、今、もうしばらくの公
的支援の継続を願う。

息の長い支援が必要となるが、ゆっくりと、耳を澄まし、避難されている方達が目
を向けてくれた時に、いつでもそこに居て支えられる体制を創っておく事が大切であ
る。

(3) 今後の展望

70名余りの「健生ネットワーク京都」の会員が京都府内において、日常的に地域に密着した活動を広域に渡り展開している中で、この2年間は「東日本大震災の被災者支援」事業活動を通し、「健康生きがいきづくりアドバイザー」の本分を再認識し、社会貢献に繋がる事業を会が一丸となって取り組むことができた。また、そのことにより、各行政機関や自治体にも知名度を深めることができた。

京都「プラットフォーム」のネットワークで結ばれたこの絆を大切に、その継続に務め、常に避難者への気持ちに沿える「健生」でありたいと思う。